ヴァルガンテとシリス

xelkener

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界ファイクレオネの中世を舞台に、「アレフィスの真実」と呼ばれる辻売り本を手に入れた主人公は神の怒りに困っていた神族のヴェルガナに呼び出され、アレフィスのシヤとして自分が聞いてきた物語を語っていく。

※　この小説は原作が中世ファイクレオネに書かれたリパライン語による小説であり、それを訳しています。各話は原文・訳文・脚注の順番で並んでいます。原文のリパライン語に関してはこちら（ｈｔｔｐｓ：／／ｗ．ａｔｗｉｋｉ．ｊｐ／ｃｇｗｊ／ｐａｇｅｓ／４２．ｈｔｍｌ）を参照して下さい。

目次

懐かしさ（la kosnyl）　1
呟き声（la nubefi, e）　11
大きなヴィンカ（vinkajt）　22
誉れ高きヴェガードのヴロイヤ（myl onnasch vegarden vuloija）　33

懐かしさ（la kosnyl）

valgantestan parl cilis barlie, czuve lg flaniety. lena, d lafferril iony la lexm’es julufiie, si ingglim icve alfi’a. selene si il jeteson krante pelxj ol veles tvarlo ete, d valgante, stlyme. sixelerfka me jel fi, anxaste. liaxao staxxervo disnostalst. valgantephesta nalfon nun ny la lex. ”ej, la malcastan mol?” ostastan malfarno mal vietist. ”niv, edixa ci tejiest lu. menial, mie sniv ost ja lu.” ”har, ediolll mi kantet niv la lexe, d ma lcastan dea. ers fi, anxa, d malca ja!”

”ｅｒｓ．．．．．　ｌａｒｊｅｌｍｅｒ　ｌｕｒｎ？”

”ｉｎｔａｒｍｅｒｄｅｔｔ，　ｍｏｖｉｅｒｓｔｉ，”

ｖａｌｇａｎｔｅｐｈｅｓｔａｎ　ｆｏｆｆｏｄｙｅ　ｌｉａｘａ．　ｓｉ　ｔｉｓ

ｏｄ　ｅｓｏ　ｏｓｔ　ｆａｕｔ　ｓｎｕｍｅ　ｐａ．　ｆｅｉｎ，　ｆｅｖｉ，　ａ

ｘａｌｅ　ａｕｂｅｓｅｍｅ　ｊｅｘｉ，　ｅｒｔ．

ｓｉ　ｘｅｌｎｋａｎ　ｏｓｔａｓｔａｎ　ｍａｌ　ｅｎ　ｆｉ，　ａｎｘａ．　ｓｎ

ｕｔｏｋｍ，　ｅｓ　ｉｒｃａｌａｒｔ，　ｆｌａｎｉｅｔｙ　ｌｅｔｉｘ　ｎｉｖ

ｓｅｄｏｔｅｒｌ　ｐｅｓｔｒｉｅ　ｊｏｌ　ｅｓｉｌｅｃｅ　ｌｉｎｅｍｉｎｅ．

ｍａｇ，　ｓｉ　ｖａｒｆｅｘｅｒｆｅｌ　ｅｓｏ　ｆｉ，　ａｎｘａｓｔａｎ　ｆａ

ｕｔ　ｆｉｘａａｌ．　ｌａｒｐｉ　ｄｅｌｏｋ　ｍｅｌｓ　ｅｓｏ　ａｃｓｅｌｅ

ｆａｌ　ｆｑａ．　ｍａｌ　ｐｅｒｎｅ．　ｓｉ　ｆｅｎｋｌｏｒｖ　ｐｅｎ　ｐ

ａｒｌｏｌ　ｃｉｌｉｓ．　ｘａｋａｎｔ　ｅｓ　”ａｌｅｆｉｓｅ，　ｄ　ｃｉｒｌ

ａ”．　ｆｏｎｔａｌｉａｘｉ　ｆｅｎｉｌ　ｉｏｌｘ　ｆｈａｓｆａ　ｖｅｌｋｎ

ｅｎ　ｙｔａｒｔａ　ｌｕｌａｓａ，　ｌ．

”ａｒｎｅｍａ．”

ｅｄｉｘａ　ｊｏｌ　ｖａｌｇａｎｔｅｐｈｅｓｔａｎ　ｊｕｓｎｕｋｏｎ　ｄｉｓ

ｔｙｋ　ｍｅｔｉｓｔａ．　ｓｉｍ，　ｉｊｉｅｓｎｅｓ，　ｆｌａｎｉｓａ，　ｄｊ

uluupiavertz ta. flan larqo ad xalurmer lkafi, a.

"coes Xepare?"

"niv, mi es xarzni, ar lap lu."

"kienul io minun osta, lpa."

si m' jel la verben, yst systus.

"arti!"

xarzni, arstan vaxirln la cil mal karse

cid fiurs.

"mal, co icve akrapt lu tirne?"

"niv! ers enal."

"arti..... lirs, lu co klie fua velbarle

?"

"co xel harmae fal mi, hortxertekhesti?"

"ers valgante xici jarneu!"

cinefflesvergon vietist.

"cod ferlkes?"

”lior niv mi.”

”arti, cene niv mi es la lex, i.”

”harmie?”

”cun, tvarcarver, tj dekuto at es festen a.”

jol si tisod moliupi, avo harzatonj fau t ci. pa, fhasfa en snutoka, l pesta qat evirelesil ci, st. ers tvarcarver. ci h artkarfel ny la lex. fi co karx celdin o, jostol mi. mal, ki, eon fanken sial l er.

si xel larfistan mal jel fhasfa, d la k osnyl liaxu

そのヴァルガンテ827年頃から現れた社会的集団。貴族がパトロンとなり、詩人を養っていたこの頃、詩人を育てる詩学院（クローマ）の競争が過激化していた。この競争の中で暴力的に利益を得ようとした詩人のことをヴァルガンテ（valgante）

と呼び、これに由来するマフィア集団は現代のユエスレオネ連邦に至るまで存続している。はシリスクレオス・ド・メアパトロネスト（ｋｌｅｏｓ，ｄ　ｍｅａｐａｔｒｏｎｅｓｔ）と呼ばれる大陸西方の集団による独特な書のこと。奴隷の血に蛇の毒など溶血作用のある物質と膠を混ぜたもので書かれている。をフラニェテュ彼らが信仰するリパラオネ教の礼拝所であるフィアンシャ（ｆｉ，ａｎｘａ）の祈りの場に置かれる巨大な布のこと。リパラオネ教フィシャ派では、この布から聖職者であるシャーツニアー（ｘａｒｚｎｉ，ａｒ）の衣服であるフラニザ（ｆｌａｎｉｓａ）を作ったりする。で出来たバーリェ本を包む布。中世において本は革装丁をされているのが普通であり、これらは革鞣しにどんぐりの殻や傘、枝などを煮詰めた液体を使っていた。このタンニン臭が手や衣服に移らないようにするために、読む際に本を包むのにこれを使ったとされる。で包んだ。このレナの月レナ（ｌｅｎａ）とは、リパラオネ教の神族（神の化身のようなもの）の一つで、本来学問を司る。しかし、修正リパラオネ歴においては１月頃を指す名称として用いられている。これは教典、ラフェールフォルネクス（ｐｈｏｌｎｅｋｓ）という植物の種のこと。１２月から１月の間に空を飛びながら媒介するため、冬の風物詩となっている。の時には珍しくこの時期は冬ごもりと複数の新年祭の準備のために商人は１１月末頃までに商品を売っぱらってしまう傾向があった。現代リパライン語では年末年始のことを”ｎｅｆｃｉｌｅｒｉｌ”というが、原義は「商人の居

ない時期」である。、彼は道すがらアルフィア辻売り本のこと。商人が渡り歩いて売る本であり、内容は貴族が命じて詩人などに書かせるものとは異なり、非常に俗で民衆的なものが多かった。を手にしたのだ。彼はすぐにでも読みたかったが、他のヴァルガンテに奪われるかもしれないと思った。

　周りを見渡すと、彼はフィアンシャリパラオネ教の礼拝堂のこと。昔から様々な社会的機能を持っていたが、フィアンシャの襲撃に対しては聖職者が命を懸けてでも抵抗するように教典が命じていたため、幾らヴァルガンテとあってもおいそれと手を出せる空間ではなかった。が立っているのを見つけた。丁度、オストフィアンシャが養育していた孤児のうち、自由にフィアンシャの外に出るのを許された者のこと。素行がよく、忠実な者が選ばれ、フィアンシャのお使いとして使いっぱしりとして働いていた。が走り去ろうとしていたところだった。ヴァルガンテの男は、それを捕まえて次のように問うた。

「おい、御母様リパラオネ教の聖職者であるシャーツニアーのうち、フィアンシャを統括する最高位のシャーツニアーのこと。初めてあるフィアンシャに訪れたときは、そこのジェパーシャーツニアーに挨拶しなければならないというしきたりがある。正式にはジェパーシャーツニアー（Ｘｅｐａｒｘａｒｚｎｉ，ａｒ）と呼ばれるが、口語的には”ｌａ／ｌｕ　ｍａｌｃａ”「御母様」と呼ばれる。は居るか」

オストは困惑しつつ、答えた。

「いえ、母は消えました。でもないと、僕はオストになれないでしょう?”ｌａ　ｍａｌｃａ”という口語表現を文面のまま受け取った誤解である。上述の通り、オストは孤児であるため母が居るはずがない。」

「違う、その母じゃなくて、フィアンシャの母だ」

「すると……大工さんのことでしょうか?」

「もう良い、馬鹿が」

ヴァルガンテの男は辟易した。オストは賢狼狼（ｓｎｕｍｅ）はリパライン語では「賢さ」などを象徴する。だと思っていたのだが。きっと、フェヴィアリパライン語による民族英雄叙事詩「スキュリオーティエ叙事詩」に登場する人物の一人。英雄たるユフィア・ド・スキュリオーティエの弟であり、家族が次々と死ぬなか継承権を放棄したユフィアに代わって当主を継承した。しかし、フェヴィアは自分の策を過信し、敵に抹殺されてしまう。このため、フェヴィアという単語は中世あたりから「奢り」を象徴するようになった。の如く自薦したに違いない。

彼はオストを無視して、フィアンシャへと入っていった。礼拝堂は静かで、リネミネフラニェテュをシャーツニアーの制服であるフラニザにすること。をしたばかりなのかフラニェテュは新品だった。それで、彼はこのフィアンシャがフィシャ派リパラオネ

教最大の教派である。他には、ヴィデュン派やトユター派などが存在する。のものだと察したリネミネはフィシャ派しか行わないためである。。ここが無人であることに安心し、腰を下ろした。慎重にシリスを包んでいた布を開いていく。その題名は「アレフィスリパラオネ教の信仰対象たる唯一神、母神とも呼ばれている。の真実」。ページを捲ろうとしたところ、誰かの声が耳に滑り込んできた。

「こんにちは原語は”ａｒｎｅｍａ”、これはシャーツニアーがフィアンシャに入ってきた人間に向けていう挨拶である。一般的にこの挨拶からフィアンシャと礼拝者のプロセスが始まっていく文化的な境界のようなイメージがある。」

ヴァルガンテの男は驚いて飛び上がりそうになった。振り向くと、フラニザの少女が立っていた。白い肌と服が光っているようだった。

「お前がジェパーシャーツニアーか」

「いいえ、わたくしはただのシャーツニアーです」

「門のところで、オストに訊いたんだがな」

彼はバツが悪くなって、言い訳をした。

「あら！」

シャーツニアーは合わせた両手の指を絡めながら、目を輝かせた。

「それでは、神から印原語は”ａｋｒａｐｔ”、アレフィスがその人を自らの教えを伝え

ゆく中で重要であると見做して、幸福があるよう見つめられることを示す。「祝福」と訳される場合もある。を受けたのですね？」

「違う！　門ってのは入り口のことだ！”ｋｉｅｎｕｌ”はリパラオネ教の神族（神の化身のようなもの）を指す婉曲表現としても使われる。神族はリパライン語上では物や機能・仕組みのように扱われる場合が多いため、後置詞を伴って”ｋｉｅｎｕｌ　ｉｏ”と書くことで「神族に（指示されて）～」と読むこともできる。このため、シャーツニアーは誤解している。」

「あらあら……まあ良いです。あなた様はヴェルバーレ教典に定められたシャーツニアーの聖職の一つ。フィアンシャに訪れた礼拝者に食事を与えることであり、シャーツニアーはアレフィスの元で祈りを捧げた食物を訪れた教徒（など）に与える。古来から貧困で喘ぐ人々への社会保障的な役割を持っていた。のために来たのですか？」

「俺が誰に見える、ホートシェート女ホートシェートは木の一種。スキュリオーティエ叙事詩において、英雄たるユフィア・ド・スキュリオーティエにその副将達がこの木の下で忠誠を誓ったため、ホートシェートは「正直」を象徴する。つまり、「正直に答えろ」の口が悪い言い換えと言える。」

「ヴァルガンテさんでしょう？」

全く怯えずに彼女は答える。

「お名前は？」
「構わないでくれるか」
「あら、無理なお願いですね」
「何だと？」
「礼拝者とお話をするのもフェステナ教典「アンポールネム」に定められたシャーツニアーに課された聖職のこと。アンポールネムの読書、説教、ヴェルバーレ、フィアンシャと信仰の防衛、善行の五つが定められている。特に防衛に関しては「最後に書かれたもの」（ｐｅｔｅｘ　ｋｒａｎｔｅｅｒｌ）と呼ばれ、シャーツニアーが命を懸けて果たすべき義務とされる。なので」
　彼は彼女を無視してやろうと思ったが、次の言葉が出てくる前に礼拝堂に誰かが入ってきた。礼拝者だ。彼女は「もし助けが必要なら、私を呼んでほしい」と伝えると、そそくさと彼の元を去っていった。
　その背中を見ながら、彼は何か懐かしいものを感じていた。

呟き声（la nubefi̧e）

liaxa valgantephestan shobe flanietym
alfi̧, anxa eski. selene sikrante cili
sfal acsele polto. mag, si m’icve niv
yrpla las, fanken.

sijusnuk fastafi̧, anxa eskirgilece. c
un’, xelerl nesteon es nefdalle feyzuk
lie. sitisod nylalex. sivelesesso
dolumiten. pa, laback’i xelfailusarke
so valkarsa’d puder melx jol ankalefer
lestanes le konametis lyme. fgirio f
i’anxastan tejiest liaxa. si flanon fe
gesfefe mal fgirio mian zu zaliziales
jurFe’d puder lexil io.
”metista’, cope es dolum ja?”

valgantephestan movies sime zu nun fil xrirron. pa, mianastan junarle la lexe’ cmal lkurf ny la lex.

”mi kantet 100 lu.”

”e kinulusti?”

”jexi’ert, lu alefis kin el co lu.”

”harmie kienul es xale fqa?”

fka katurj leusj klerut valkarsa’ dla lusarkes a cilkurfil. ci’s si’st xel ejton xalur raldeen vazarni xenapart m allesXilestan es nynierger. mianastan belsh si mal fas plasio.

”co veles icveo akrapt fal cirla.”

”edixu blurja mol niv ja pa.”

”edixa la lex mol lkurfil xarzni’ arsta na’tj.”

”blimesti.....”

valgantephestan lkurf xale lex. pes tasilece lax, it, sid larfibackal iokarkxelal lersi senost kantakirsoj tsikon cayfizireffe melx edixa xel ctlirnieno. lax es xale minarsa, dd exafel. edixa mananstan reatetolon cilefferges. "liaxulu alefis fae lu." "metista, lax es mer?" dyrilerl iokarse xale stelains mal st ienies polto, lfidafel indones xale gu stufon vefisait elmal. mananstan larp yles.

"dalle jelerl, mi es velganaa zu kienul fuaelmo lu." "mizu veles derokovelganaa, stiveles

eso harmie, it?”

”fal cirla, mi karx celdino co, stlu.”

valgantephestan notules la lex. kienul

karx niv celdino larta, st.

”deliu mi celdin mels harmie?”

”miss ve karx cija fua lu alefis dono”

”mi esniv cija.”

”pa, ers klorma.”

valgantephestan m’esunsar lakeule, firl

exletixo adiogrehe derokerlust. ezkl

ormaesil m’es penuleuce, mi firlex niv

belx cene kranteo acirlon. si neffans

telacilon lkurf edixa.

”dalle tisoderl, velgo mi es niv suite

fuala lex.”

”pa……”

velganap’ lurfodek, ekceilon fas lkurf

o.

”mal, cene niv co ve dosnud el dexawardn.”

”harmie? edixa mi jisesn?”

”niv, fqa es dexawarden ad majnoswardn cecio unde. edixa lu alefis laozia el x nefmolojten unde fai la fae. la faes tan f, is ircalart, undestan tejiest mel x wiolll jol cene co dosnud.”

”ban missen tonir l, es alefis io……”

edixa si nubefi, e.

ヴァルガンテの男はフラニェテュを掴んでから「祈りを捧げた」ということ。リパラオネ教では特に祈りのジェスチャーなどは決まっていないが、礼拝堂であるフィアンシャ以外で祈るときはフラニェテュを掴むような仕草をする。フィアンシャの外に出た。彼はシリスを人のいないところで読みたかった。だからこそ、ユープラリナエスト

人などが食すフラットブレッドの一種。ヴェルバーレで渡される食事の代名詞であるため、ここではヴェルバーレを受けなかったことを意味する。すら受け取らずに去ったのだった。

　男はフィアンシャを出た途端に驚いた。目に見える風景が来たときとはさっぱり違っていたのだ。彼はドルムリパラオネ教における悪魔のこと。人の怨念の集合体が意思を持って実体化したもので、神と人の敵である。リパラオネ教的歴史感（ｓｉｌｆｉ，ａ）では、アレフィスの軍勢による最終戦争で滅ぼされるとされる。に憑かれたのかと思った。しかし、ヴァルカーザ木の一種。紫からピンクの可憐な花を咲かせる。スキュリオーティエ叙事詩においてユフィアを神族がヴァルカーザの木下で祝福したことから、その花は「ユーフェの花」（ｊｕｒＦｅ，ｄ　ｐｕｒｄｅｒ）とも呼ばれる。の花の香りに振り向いたとき、その思い込みはよりそれらしく思えてきた。そこにあったはずのフィアンシャが消えていたのだ。ふと、顔を上げるとそこにはユーフェの花ヴァルカーザの花のこと。飾りを頭につけた少女がいた。

「もしや、お前はドルムか？」

　ヴァルガンテの男は素直に訊いた自分が馬鹿馬鹿しく思えた。少女はそれに狼狽えた様子で、次のように答えた。

「私は１００を表します年齢ではなく、ヴィトゥアと呼ばれる数秘術の一種で単語が表

されている。アレス式ヴィトゥアにおいて１００は門（ｋｉｅｎｕｌ、１５＋２２＋２０＋１２＋１８＋１３）などを表す。門はリパライン語では神族を象徴するため、ここでは暗に自分が神族であると言っていることになる。」

「示しの理由？原文の”ｅ　ｋｉｎｕｌ”は”ｋｉｅｎｕｌ”と同じくアレス式ヴィトゥアでは１００になる。ヴァルガンテはヴィトゥアを属する詩学院（ｋｌｏｒｍｅ）ごとの符牒として使っていたため、よく使う言葉に対応する数を覚えていた。このため男が即座に言葉に変換できるのは何もおかしいことではない。」

「その通りです、アレフィスは貴方に示されました本来の意図とは異なるため「違う」と否定するところだが、この時代ではヴィトゥアが同じであれば抽象的には同じ言葉であるとされたため否定していない。それと同時に「アレフィスが示した」という言葉によって、ヴァルガンテも文脈からヴィトゥアが同じ１００である”ｋｉｅｎｕｌ”「門」に思い至るのである。」

「何故、門神族のこと。がこのようなことをするのか」

　彼女が話すたびにヴァルカーザの良い香りが辺りに満ちた。よく見ると、汚れのない赤色のシェナパート本来、スキュリオーティエ叙事詩が描く時代の正装を指すが、ここではスカート部分の長いアンフィレン・アパートという別の衣服を指す。中世ファイクレオネにおける若い女性の正装である。和風のロングワンピースと言うとイメージし

やすいだろうか。を着ていて、髪の色は銀だった。少女は彼に微笑みかけ、説き始めた。
「貴方は本当にアレフィス様から印を受け取ったのですよ」
「ブルーヤ神や神族の声のこと、或いはそれらが人や世界に影響を及ぼそうとする前兆のこと。は無かったぞ」
「あのシャーツニアーとの会話にありました」
「暴君原語は”ｂｌｉｍ”、これはスキュリオーティエ叙事詩の時代にあったカウィチェレイ藩国の君主号「ブリモウ」を本来指す。このブリモウは代々暴君として知られたために暴君の代名詞となっている。め……」
　そうヴァルガンテの男がいった直後、彼の背後遠くから何かが爆ぜる音が聞こえた。彼は半身をひねって、背後を見た。すると、そこには煙が上がっているのが見えた。それはまるでミナースの火リパラオネ教の教典「アンポールネム」の一節に書かれた説話の一つ。ミナースと呼ばれる島はアレフィスの教えに反したため、その軍艦が爆ぜ、しかも島も燃えて海の下に沈んでしまう。のようだった。
　少女は苦笑しながら両手を掲げた。
「アレフィス様はお怒りのようですね」
「もしかして、あれはメーリパラオネ教の教典「ファシャグノタール」に収録されている「戦記Ｉ」の中に書かれた兵器のこと。ヴェルガナが神の怒りを兵器として、正しく信仰

し祈った人に与えるとされている。なのか？」

空で流星のような閃光が生じ、光の束が遠いところへと落ちてゆく。それはまるでヴェフィサイトスキュリオーティエ叙事詩の時代に貴族に仕え、国の武力として封建的な関係を結んだ集団のこと。武士や騎士に例えられることが多いが、リパラオネ系民族であるヴェフィス人から選ばれることが普通であり、独特の文化や習俗を持ち合わせた民族的社会集団であった。の戦場における矢の如く地に降り注いだ。少女は首肯した。

「お察しの通り、私はヴェルガナ戦争の神族。争い好きで、他の神族同士の喧嘩や人間の戦争に加担したりする。神族の中でも古くから信仰されており、海も司るとされている。名前は古典リパライン語の「駆逐、殲滅」に由来する”ｖｅｌｇａｎ”から。――戦争の門です」

「ヴェルガナに呼び出されて、一体何をされるというんだ？」

「実を言いますと、貴方に手伝って欲しいことがあるのです」

ヴァルガンテの男は訝しんだ。門が人に手助けを乞うものか。

「俺は何を手伝えば良いのか」

「というのも、私達はアレフィス様の怒りを収めるためにシヤスキュリオーティエ叙事詩の時代を含む古代ラネーメ王朝の時代において、旅路で面白い話や歌を歌ってくれる付き人のことを指す。主に藩国の貴族などに雇われた。を欲しているのです」

「俺はシヤじゃないぞ」
「しかし、クローマ詩学院（ｋｌｏｒｍｅ）の教師のこと。パトロンとして貴族の支援を得ている詩人であり、有力な政治力と高い執筆能力を持った人物であることが多い。ではないですか」
　ヴァルガンテの男はため息をついて、逃れられない役目が与えられているのだと悟った。まともなクローマだったのは遠い昔のことで、今になっては頌歌も書けるか分からない。彼は思い立って言った。
「やはり、俺にはその役は務まらない」
「しかし……」
　ヴェルガナは言いよどんだ。しかし、すぐに喋り始めた。
「それでは、貴方はデシャワーデンリパラオネ教の世界観の中で人間などが住む世界のことを指す。に帰れませんよ」
「何？　俺は死んだということか？リパラオネ教の世界観では、人は死ぬと魂がそれまで暮らしていたデシャワーデンから行いによって神の世界であるマイノスワーデンと二つの世界の外であるクイト（ｋｕｊｉｔ）に振り分けられる。このため、ヴァルガンテの男は自分が死んだものと考えたのである。」
「いえ、ここはデシャワーデンとマイノスワーデンリパラオネ教の世界観の中で神や神

族が居る世界のことを指す。良い信仰者は死後にここで清められ、幸せになるという。の間の世界なのです。アレフィス様は怒りによってこの不安定な世界を作ってしまったのです。もしその怒りを鎮めることが出来れば、この世界は消え、貴方は元の世界に帰ることが出来るでしょう」

「我々の神、恵みのアレフィスにおいて……バンミス（ｂａｎｍｉｓ）と呼ばれるリパラオネ教の聖句の一つ。スキュリオーティエ叙事詩の各部のはじめに必ず付される文であり、ヴァルガンテらしい呟きとも言える。」

彼は呟いた。

大きなヴィンカ（ｖｉｎｋａｊｔ）

liaxu valganteph des velganą, tj. filx

jostolo furXvorkal, ci yuihurk fas desoo

fasta mer pusnistil. fi mi veles fank

eno fal flan poltostan, is miestе. deli

n des lotj ircalart pelx edixa kornite

u si ve josxe fillelx texterl. si irxo

s valkarsą, d la klerut ci, dy.

”amoler puder es niv filena ja?”

”slommirca at lkurf xale la lex lu.”

”me, harmie co vietist fal cirla?”

belche, d la belshe, s da velgan la velg

ern, cla mol del da faus karx ja. velg

ana belsh velgan belarxte fast velxa

lurmerkh tidirkh jelo lap. wiolll belsh

ostan pusnist elx piesteten elmo. pa, e rs nivsuiten fua fusaf vaxirlno fonv algante. cifas yuihurk sniroryo.

„la jurFe, d pudergen jexert, ieu nu nersti

co fuaj mi, s ve sniror aler durxe wi

ol jol.

pa mi, s lkurf delus jol. cija, s z, es

co altil

elje mi, s la durxestan, ieu niv ves

nirorr!”

valganteph estan mak esunsar lakeule.

edixa nisss zel deso falx liestu xale a

kranti isykil viiumustan. metista, jol c

ene akranti :d, l, arfes blard, dqa, d ton

irnascher:.

velgana yuihurk pusnist pes

drk
mal
ny
lxul
laj
xale
fegusteson

rxa’c
tytavirgi.
cilletix
skhorlka’d

tamal
xedysen
snusel
lleus
rattelesla

adawi’umen
dejixe’d
flanisa
adcherkar

vertz
josnyn
arlatarkesonj.
cixalurl

tal.
pannqa
fallerla
lex
ilerjulupia

oler
snutokass
molarkkinies
vegarden

nes
xale
konceg art
fonpenten
namo.
l

ci
faipes
dlirlo
vietist.
vinkaxy
syte

”luaalefis
milicolu.”

”harmae
fqa
io
mol
?”

”lecu
enlu.”

lex
kantetert.

ad
yrilert.
valgantephestan
firlex
la

rilerl’m,is
lodesten,
iskonli’
esteili’

ntalobusal
io
vinkajt
josnyn
liaxu.
dy

trie
jol
siny
vynutesilce.
nisse’d
fo

stistoj la lex edixa. fiursustan, i lal es mi, l mal fegestan is fynet.

"cope es cija, d annia ja?"

"ar, ja. metista?"

"mal, jeteson fas snirorvo shrlo ja. ve lganasti, co mol mi, tj."

"dqate malca es xale la lex ka....."

valgantephestan pzeniatzes filx nisss enosto. alefis es niv le belchergen mo lo? liaxa si, d Xilfi, a fontals snuvod.

"mal, lu alefisestiiiii....."

valgantephestan sties xale la lex mal qa' d ytarta vietist. Harmie? cun, kienu l ad tonir cecio estalle mol niv. sil kurfesk celenerve, tj.

"lu konavlasaflanisekhertzerstiî"

"sties mi leusj arciesija."

”carli, lu arciesijasti”

arciesija vynutalon corshes.　deliu si alcames fillelx texterl.

”me, cope, d ferlk es harmie?”

”mi, d ferlk las es destaf lu.”

”destafasti, co veles tansteo edixa.”

liaxu destaf tisod ny la lex.　velesot anstesoo le vynut feus tansteso kutyves.

”mal, mi fas panqate kaxtlurk.”

destaf lkurf xale la lex melx qa ircal art lot arcies.

ヴァルガンテの男はヴェルガナと歩いていた。メーが止んだ後、行き先を伝えることもなく彼女はいきなり歩き始めた。この何もない場所に一人で置き去りにされてしまえば、どうしようもなくなってしまう。そういうわけで、彼はヴェルガナについていかざるを得なかった。彼は黙って歩いていたが、ヴェルガナから発するヴァルカーザの良

い香りを疑問に思った。

「花を置いたのはフィレナでは無かったかスキュリオーティエ叙事詩において、ヴァルカーザの花を英雄ユフィアの頭に置いたのは神族のフィレナである（ｓｋｙｌ．４：ｌ４　６）。」

「スロンミーサも同じようなことを言っていましたよスロンミーサ（ｓｌｏｍｍｉｒｃａ）は神族の一柱、スキュリオーティエ叙事詩ではユフィアの仲間として人間の姿で副将になる。」

「それで、本当のところはどうなんだ」

　ベルチェの笑みはヴェルガナが欲するところにあれと願うべきなのか紀元前４４００年代に書かれた叙事詩「アルダスリューレの行」の第４９区切り（４９ｔｅ　ｋｒａｎｔｉ，ａ　ｆｏｎ　ｌｅｉｊｕ　ｆｏｎ　ａｌｄａｓｒｙｒｌｅ）の引用である。ヴェルガナの微笑みはヴァルガンテの男原文は「スカーフを巻かれた者」（ｖｅｌ　ｘａｌｕｒｍｅｒ　ｔｉｄｉｒｋｈ）の男性形であり、詩語でヴァルガンテを指す。）が彼女を使えないと思わせるばかりであった。その微笑みは全地の争いを止めるであろう。しかし、ヴァルガンテの複雑な心には響かなかった。

　ヴェルガナは唐突に歌い始めた。

「ユーフェの花の香り聴き　理由（わけ）は何故かと問う者よ

我、汝のためいざ詠わん　長きそのゆえ高らかに
その代わりとして一つだけ　汝に役を課させよう
汝がシヤを果たすまで　我その詩を歌うまじ」スキュリオーティエ叙事詩に頻出する韻律であるラネーメーゲン韻律（ｌａｎｅｒｍｅｒｇｅｎ　ａｇｃｅｌｌｅ）を使った四行詩である。脚韻をＡＢＡＢで踏んでおり、形式も非常に典型的なものになっている。日本語訳では七五調で訳してみたので、任意のメロディで歌ってみると良いかもしれない。なお、筆者は「歩兵の本領」のメロディで歌いながら訳した。

ヴァルガンテの男はまたため息を漏らした。

彼らは一編原語はｖｉｕｉｕｍｕｓｔａｎ。スキュリオーティエ叙事詩の区切り単位の一つであり、章の下に属する。ユフィア章のように短い編もあれば、フィシャ章レチ記前編のように長い編も存在する。が読めるくらいの時間歩き続けた。きっと「流された農民と三柱の神族」スキュリオーティエ叙事詩ユフィア章の第四編である。敗走したユフィア達が流浪しつつ落ち着く話であり、ヴァルガンテの男の状況と重なる。が読めることだろう。男が一つ愚痴でも言ってやろうかと思ったところで、ヴェルガナはいきなり立ち止まった。彼らの目の前に大きなヴィンカリパラオネ人が立てた高床式住居の類を指す。が現れていた。頭上は曇り、雨模様の空となった。ヴァルガンテの男はそれが何を指すのかを理解していた。

「入りましょう」
「ここには誰が居るんだ」
「アレフィス様があなたを待っております」
　彼女は階段を登りながら答えた。ヴィンカの中は極東水道の行商宿スキュリオーティエ叙事詩の時代、アレス王朝において極東水道と呼ばれる極東地域の沿岸の街道が皇帝によって整備された。しかしながら、依然長く険しい道であった。このため、関所で税を取りたい藩国主達は行商達を呼び込むために豪勢な行商宿を整備した。そこから、客を受け入れる豪華な建物のことを「極東水道の行商宿」と呼ぶようになったのである。のようだった。大広間の先には多くの部屋が見えた。そのうちの一つから仕切り布をよけてヴェルガナより少し大人びた少女ヴェルガナは ”ｍｉａｎ” と呼ばれていたのに対して、ここの少女は ”ｊｕｌｕｐｉａｖｅｒｔｚ” と呼ばれている。前者は７歳から１５歳ほどを指し、後者は１６歳から１８歳ほどを指す。が出てきた。彼女はラダウィウム色ラダウィウム（ｌａｄａｗｉ，ｕｍ）はローシャヘラ分類法で葉萼部ラダウィウム縁ラダウィウム家（ｒｉｖｏｓｎａｒｘｙｐｕｒ，ｄ　ｍａｒｌ—Ｌａｄａｗｉ，ｕｍ，ｄ　ｋａｘｉｌｉｊａｓ—Ｌａｄａｗｉ，ｕｍ，ｄ　ｄｙｓｔｉｓｔ—Ｌａｄａｗｉ，ｕｍ）に属する植物の総称。オリーブグリーン様の実を低音で煮てロウ（ラダヴォイム、ｌａｄａｖｏｉｍ）を生産することができる。ロウを取った後

の果実はニスティッラダウ（ｎｉｓｔｉｌｌａｄａｕ）という甘味として食べる。ラダウィウム色はこの果実の色である。のフラニザとチェーカータ腰巻きのこと。元々はラネーメ民族のバート人が着用していたが、文化的な影響圏に属していたリパラオネ民族であるタウニラウィッリー人を通してリパラオネ人の服飾に入っていった。ここでは衣服の上から腰巻きを巻いているが、本来バート人はこういう着方はしない。を着ており、金の縄で腰にテュタヴィどんぐりを割る道具のこと。どんぐりはリパラオネ圏では良く食される。を結びつけていた。彼女はスホールク葉萼部ユーフェ花縁ヴァルカーザ家の一年草。いちご様の果実がなるヴァルカーザの遠い親戚。の実を手に不機嫌そうな顔をしながらかじりついた。目がこちらに向くと、その表情は明るくなった。

「お前がシヤか?」

「ああ、まあ。多分な」

「では、すぐに歌を始めなさいよ。ヴェルガナ、あなたは私と共に居なさい」

「第三の母第一の母は産みの母、第二の母はフィアンシャのジェパーシャーツニアー、第三の母は唯一神アレフィスである。創造主であるとともに母神であるとされているため、こういう別称が存在する。がこうとは……」

　ヴァルガンテの男は聞こえないように愚痴を漏らした。アレフィスとはもっと母性的なものではなかっただろうか。彼のジルフィアリパラオネ教的歴史観のこと。は殆

ど壊れかかっていた。

「それで、アレフィス様」

そう、ヴァルガンテの男が呼ぶと二つの声が答えた。何故か？　門とアレフィスの間に差異は無いからである「門」が表す神族は、リパラオネ教における天使のようなものと説明されがちであるが、神族とアレフィスは同一のものである。神族は現世にアレフィスが覗く際の窓のようなものであり、唯一神の姿の一形態であり、アレフィスを一挙に捉えきれない人間の認知であるとみなされている。だが、本質的には同じであるためこのように居合わせた際はアレフィスへの呼びかけに二人共答えることになるのである。彼は苛つきを覚えながら言い直した。

「変なフラニザを着たお嬢様よ”ｋｏｎａｖｌａｓａｆｌａｎｉｓｅｋｈｅｒｔｚｅｒｓｔｉ”　で一単語だが、会話でこんな長大語が出てくることは少ないため滑稽になってしまっている。」

「私のことはアーシェジヤ”ａｒｃｉｅｓ―ｉｊａ”　つまり、「傾聴する者」の意。名前語尾が付いているので呼び名であることが分かる。と呼びなさい」

「左様、アーシェジヤ様」

アーシェジヤは満足げに頷いた。彼は大人しく従うしかなかった。

「それで、ヴァルガンテの男よ。お前の名前は何なのか」

「俺の名前は不肖、デスタフと申します」
「デスタフよ、お前は祝福されたリパラオネ教の文脈において「祝福」は、神に信仰の任務を与えられ、それを遂行するための助力を与えられることである。」
　デスタフは祝福を受けるよりも、クテュヴマツリマメ（ｌｉｒｎｉｘｋｅｄｚｎｏｒｒ）の種子を焙煎して、煮出したコーヒー様飲料。興奮作用があり、酒が禁止されていたリパラオネ教社会では数少ない興奮剤の一つだった。で乾杯したほうが良いと思っていた”ｔａｎｓｔｅｓ”　には二つの意味があり、自動詞では「祝福する」だが他動詞では「～という飲料で乾杯する」という意味になる。ここでは同じ動詞で、それらを使い分けることで言葉遊びを作っている。。
「それでは最初の物語を始めましょう」
　デスタフがそう言うと、二人は静かに聞き入った。

誉れ高きヴェガードのヴロイヤ（mylonnasch vegarden vuloija）

destaf fas sniroryo.

senost la l, d konanker, d la larfa, i

mylon, dyeu.

la ni, d ferlk veles jostolo, i fai la

sniror.

vegarden vuloija, c es mylonnasch sti

esel.

ni lan es selun fon mylon l, es la lu

rklown.

la lurklown ve m, es xan fonneu fqa, d

vegardal,

pi, en, d farrnikul, d tysnenerjte, tj s

is alt.

34　誉れ高きヴェガードのヴロイヤ（ｍｙｌｏｎｎａｓｃｈ　ｖｅｇａｒｄｅｎ　ｖｕｊａ）

ｆｅｌｘｅｕ，

ｆｑａｍ，ｅｓ　ｖｉｎｋａ　ｆｏｎ　ｘａｎ　ｄａ，　ｅｊｔｕｌ　ｆ，ｉ

ｄａ　ｄｏｒｎｅｎ？

”ｌｏｌｅｒ　ｃｏ，ｓ　ｈａｍｄｉｒ　ｆｕａｊ　ｋｌｉｅ　ｆｑａ　ｅｌ

ｄａ　ｄａｌ　ｋｖａｓ．

ｌｕ　ｋｌｏｗｎａ，ｄ　ｌａ　ｆｉｕｒｓｕ，ｓ　ｖｅ　ｘｅｌ　ｌａ　ｌ，

ｉｌｌａｓｔ．

ｌａ　ｆｇｉｒ，ｄ　ｎａｒｐａｆａｓｓ　ｘａｌ　ｋａｔｕｒｏｊ　ｄａ　ｖ

ｎｅｓ　ｅｌ

ｌｅｔｉｘ　ｎｉｖ　ｌａ　ａｌｓ　ｍｏｒｓ　ｍｅ　ｘａｎ，ｄ　ｖｉｎｋａ

ｆｉｌｘｊｅｕ

ｓｎｅｎｉｋｓｔａｎ　ｉｏ　ｍａｒｌｅｒｓｓ　ｘａｌｕｒｍｅｒｌ　ｄａ

ｔ．

ｖｅｌｅｓ　ｂｉｒｌｅｅｎ　ｆａｎｋｌａｖｅｒｇｅｎ　ｌａ　ａｋｒａｐ

ｌａｒｔ

ｌａ　ｆｑｉｕ　ｌａｒｆｅ　ｋａｉｍａｊ　ｄａ　ｆａｕｓ　ａｒｆｅｓｅｎ

fqa el kliergo v, jat nivˇ. fqa es jol

la ejtul.

shrlo jostol la kliergul fua missen

la luxul. „

vilass arcieson lkurf ny la l, dicce

lojt, tjeu.

„Lu xanstiˇ zu snenster esesu fal la m

issen

sietivgard i lax sesnuderstiˇ sietivg

ard.

senost misse, deu dicceler l, ieu da ni

llast.

la delmerX da m, josnyn, la veis snesv

a villast.

vajt.

la dorylka celdin la lartass pa snes

mianfy missenjeustan xekyd vel falir

fonla

la, es la euveisija, cz, es mielun

panqajto.

”miss lkurf la qa, d veiso falleri la

inillast da.

flarVass vietiston ve lkurf ny l, l,,

ekt la, ja!”

cosskantetu harmie fai la, ka? d

efan miss da

”melsharmie cos dekt da? veis kars

aufflarVa.

lurklown vietist xal ny la l, fontan

xmal da

xan l, es la lurklown ve jusnuk la le

”

la velbarle xaicerte missal eleu en.

lajt.

snyror’st fqiu cirlarisokjilferl ci

xjeu larto. exerten mianas, ses ladirx xal molo’s

ex. ci es aklotor flen, jukarlen mianastiu!

ciXart vel macdolum’c me lerj miss alagard lern. xanastieu! dami’splaxes celdino

’iciu!”

lallurklown senost la’l, mey’st foi

danillast.

”dolum’dzirkjais mi’c! vixath mie

ny alt jol!

dolumssu’l vulo’d ferlk’il’icvejtv

ulojas’

daverletci’itmalsto’cmelojsi’d

xefor wioll!”
la lex xal na mol mal vuloija, s stie
sejt vel.
stieser l, es xana, s xallefis si, i me
xan dekt.
”vuloijasti, shrlo is farneneu fua l,
klie altrelm
la snyror ekhertzer veles Xarto falm
et.
tydiest co, s me malst lerj dolumssal
icirg, ieu!”
vuloija, s senost la l, me dorylka xa
ldekt.
”fua flarVass, mi jol karse mi, d feg
dolum, ceu!
me filx tas, mi wioll malst fgiu snyr
or ekhertzer!”

vulojja, s doddor, i kjilf me lerj vink

acutural.

latas, ceu la rafterg, i fonkarxfa za

ntes.

dadur fausvilajta, st desalstan, dl

axendiurl

lafflarVa, st pefallirtaliummel yfa

nken.

vegard ler canergen di, an el sifurd

zvok

molon virroteu si, s lomin eskoç, josn

yn.

me si, s lerndodorves me xel la l, da

nillast.

jafaisi, st xelol, la l, esseu lax la

xorlnem.

pa, si, s karse la l, d cirlaen mol laj

eu
lax.

la
lex
m,
es
da
set
isgalin
na,
c,
vulo

ija,
s

melo,
ikjilf
me
fyrkfyrk
da
xal
ny
l

,
l,
nillast.

”dolumsti,
fi
co,
s
mol
me
co,
s
stisto

jeu
vel.

shrlo
m,
josnyn
lixerstan,
s
fasta
cos

s,
d
la
zirkess!”

me,
fhasfa,
s
vietist
el
vuloija,
d
la

dekterl.

”loquen
lartam
mol
fal
fqaval
tol!
mo

visticu!

co
at
veisestan
el
adurt
vel
da
alte

jt!”

na
lastan
io
si,
s
vel
stedel
si,
d
lev

uf
lax.

la
it
fon
cyfoi
fal
y
si,
s
pen
nyjeu

nillast.

xedirxel
melej
si,
s
ve
fas
desnie
xo

st
ja!”

vilastan
cilal
mi,
d
la
ferlke,
i
seno

rmal!

vegardenla
unders
velu
parl
fua
a

aldas!

”vuloija,
s
da
m,
es
mi,
c,
esu
xan,
d
l

a
l,
fausi.

si
tvarcar
me
xelerfkavon
lkurf
ny
l

lajt
lax.

rytiet
delnenjeu
fka,
c
m,
aken,
dzarha

illast.

melo,
s
si,
d
y
tysnen
dolisn
laj
da
n

elojklial.

pa,
si,
s
dicceleu
niv
me
cest
la
l,
m

ｌｉａｘ．
ｌａ　ｘａｎｔａｓｔ　ｌｕｊｏｓ，ｄｙｅｕ　ｉｏ　ｓｉ，ｓ　ｌａｘ　ｓｕ
ｌａｕｎ　ｄａ．
ｎｕｋｕｓ　ｆｑｉｕｊ　ｋｌｉｅ　ｋｉｒｍａｊ　ｍｅ　ｄｅｌｎ　ｐａｒｌ
ｆａｌｊｅｕ　ａｌｓ．
（ｅ　ｚｅｌ．）

デスタフは歌を始めた。
猛き者の誉れある物語を聴け
その名は詩によって伝えられる
誉れ高き名はヴェガード大陸西方のレアディオ地域の地名。のヴロイヤ名前の語源であるヴロ（ｖｕｌｏ）は鉄を表す。
彼は誉あれかしルークロウンクロウン（ｋｌｏｗｎ）はヴェフィス人の名前であり、貴人を示す敬称ｌｕが―ｒ―で膠着している。の子
ルークロウンはこのヴェガードの地の大公であり、
東方の土着の龍の偉大なる討伐者と共に彼は勝利した
この勇敢な血の注がれた人ルークロウンの息子ヴロイヤのこと。は

恵みの唯一者アレフィスのこと。聖句バンミスの”ｂａｎ　ｍｉｓｓｅｎ　ｔｏ　ｎｉｒ　ｌ，ｅｓ　ｂｉｒｌｅｅｎ　ａｌｅｆｉｓ　ｉｏ”の部分にも通じる。の印を受けた

ある日、民どもが衣服のほか

なにも持たずに大公のヴィンカへと

かのナーパフ風ファイクレオネの季節風の一つ。水道（ｎａｍｏ）の東側からの海流で水道の山岳を越えて吹き下ろす乾燥した強風のことで、韻文では勢いの激しいことの形容として頻繁に用いられる。のように殺到した

ルークロウンの目は驚きの目でそれを見た

「汝らは何のためにここへ来たのか？

ここは大公のヴィンカだ、大事がなければ

ここへ来ることは許されていない。それは大事なのだろう

我々の望みのため、来た理由を伝えなさい」

民達は（大公の言葉を）聴き、大いなる恐れとともに次のように言う

「大公様、我らが生活の地の守護者よ

我々の生活の地の守護者よ

我々の恐れをそのまま聞きたまえ

亡霊原語はデルメージュ（ｄｅｌｍｅｒｄｚ）、それまで忘れられていた存在という意味。が現れ、月が消えたのだ

天光原語はドーユルカ（ｄｏｒｙｌｋａ）、太陽と月の光のことであり、人間に勇気と力を与えるものとされる。は人々を助けるものだが、消え去った

我の力、我々のものはまさに失われた

ヴェルバーレは和気藹々と我々のところへと入ってゆく中世において、貴族と宗教家それぞれ支配階級であった。近代的な国家のような観念はまだ意識されていなかったので、支配領域が重複していることもあり、支配力を争っていた。ヴェルバーレはフィアンシャが行うものであり、この一文は「宗教家は困難に直面した人を助けているのだぞ、それなのに貴族は民を助けないことがあろうか」ということを意図している。」

大公であるルークロウンはそれに驚いて

民草の前で次のように答えた

「何について、汝らは言うのだ？　月は我々のもとに輝く

汝らはそれによって何を示すのか？　それを言え！」

民草達は答えて、そして次のようにまさに答えた

「我々は二つの月のうち、大いなる一つを言っている原語では”ｖｅｉｓ”と”ｖｅｉｓｉｊａ”と言っている。名前語尾を用いた言葉遊びである。

それはヴェイジヤ、喜びが人として現れたもの
であるところの我々の子
麗しき少女はラディーシュリパラオネ教の教典である「アンポールネム」に示された神と人間の間に生まれた娘たちのこと。ここでは吉兆を表す人の意。のような存在。
彼女は惨さを避けていた、ああ慈悲深き娘よ！
彼女は常軌を逸したドルムに連れ去られ、我々の地を去った
主よ！　我々の願いは彼女を助け出すことだ！」
ルークロウンはそれを聞いて、奮い立った
「ドルムの敵は我となるであろう！　我が子ヴロイヤのこと。は勝利するだろう！
ドルムへと鉄の名を受けたヴロイヤが
彼女を必ず取り返し、彼の栄光は増すだろう！」
かくして、ヴロイヤは（ルークロウンに）呼び出された
呼び出した主は彼を見つめ、話した
「ヴロイヤよ、来る勝利の戦いのために戦備を整えよ
麗しい乙女が連れ去られたのだ
汝は行って、ドルムの居処から彼女を取り戻し給え！」
ヴロイヤはそれを聞いて、勇気とともに語った

「民草のために、私は私の顔をドルムに見せましょう
そして、必ず麗しいその少女を取り戻します」
ヴロイヤは馬を駆って、ヴィンカを出た
腕には鋼の輪を着けて
臣民たちの住処に大きな地響きが
民草の間を通り過ぎていった
ヴェガードから1万ディアン文字通り換算すれば５００メートルほどだが「結構離れた距離」というニュアンスもあるため注意。に到着
したところで、彼に色とりどりの木が現れ、出会った
彼は馬から降りて、それをまじまじと見た
彼の見たところそれは美しいものだった
しかし、彼はその真の存在を暴いた
それは気味の悪い光景であり、ヴロイヤは
剣を抜いて、次のように叫んだのだ
「ドルムよ、お前が居るなら、お前は（居場所を）知られた”ｓｔｉｓｔｏｊ”の原義は「噛む」なので、「（我が剣の刃に）噛まれた」とも読める。
お前らの敵の前にその姿を現せ！」

すると、何者かがヴロイヤの言葉に答えた
「身の程知らずの人間がこの場にいる！　愚か者め！
お前もかの月ヴェイジヤのこと。のように連れ去られるだろう！
その瞬間、彼は腕を掴まれた
しかし彼は恐れずにはその行為者を切り、聖壇を作った人間を含む敵対的な生物などを切って、その体液を飛び散らせること。
彼の剣はまさに悪を倒した
黒い風が周囲に飛び散り、大いなる滅びがあった
彼は祈って周囲を見渡して次のように言った
「ヴロイヤとは我のこと、公国の雷雲「雷雲」という語は日本語では「不穏さ」を示唆するが、リパラオネ文学としては中世叙事詩「アルダスリューレの行」（ｌｅｉｊｕ　ｆｏｎ　ａｌｄａｓｒｙｒｌｅ）の主人公アルダス（雷雲の意）を想起させ、英雄を示唆する。！
ヴェガードの平和は尊厳のために護られる！
臣民の間に我が名は聞こえるだろう！」
木の幹の隣で、彼は休み始めた
木の陰のもとで彼は眠った

３シャンタストリパラオネ人の伝統的な時間単位の一つ、単位あたり約１０分ほど。ほど彼は眠った

その夜は早く来て、すべてを闇に覆ったのだった

（つづく）